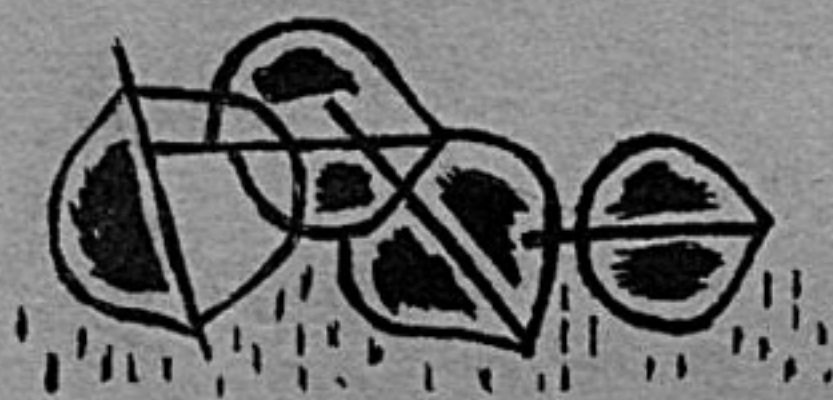


しだ



第 25 号

マウンテンニアーとは、

ただ山に登るものをのみ

山を歩き、山を想い、

山に関するの著書を読むことを好む者も

我が心の山

またマウンテンニアーである

丹沢の雪



目次

水無月はじめの書き話のこと 久保田 詔

北の山旅よりの話 鈴木 国之

足のむくままの気のむくまま 山田 進

大菩薩連嶺 碓 清人

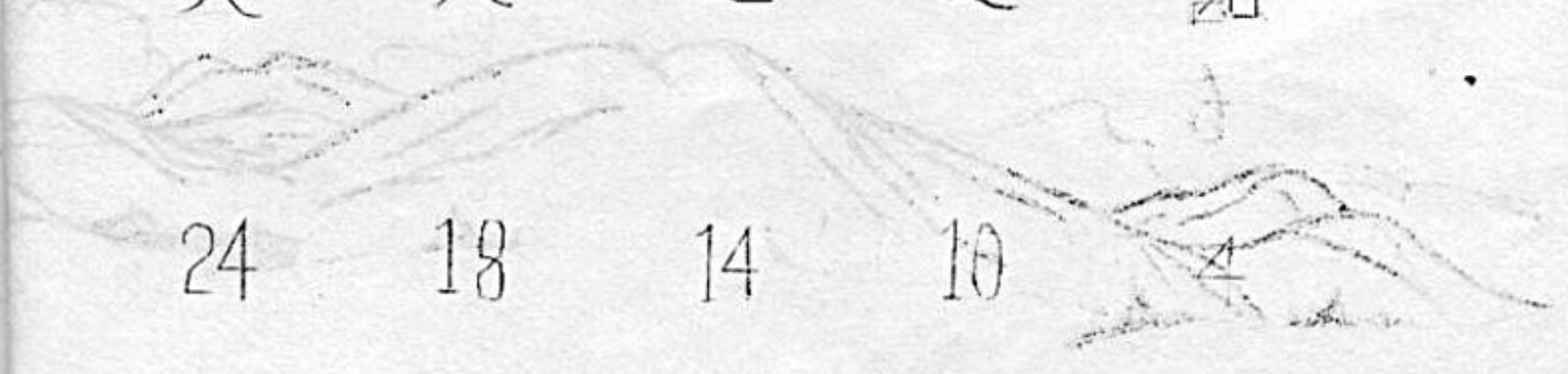
伊豆にて 原真須美

24

18

14

10



東海自然歩道道中記

山本 彰 25

ズボラ山行

横山勝利 28

アルプスの山小屋

脇美英子 30

あなたおはようござ

石川信子 35

思いつくままに

宮代信子 37

我が心の山

入倉康充 38

丹沢の雪

石川一男 40

水無月はじめ

久保田 治

憧れの平ヶ岳から尾瀬へ、それは早朝の銀山湖をポンポンとけだるいエンジンの音を響かせながら流れて行く小舟の旅から始まりました。できれば今日のうちに池の岳姫池へ原迄行きたいとの計画で釣舟をチャーターしたのです。厚い雲は湖の上に低くたれ込め、まだ深い眠りからさめていない周囲の山々をすっばりと隠しています。そのなかを小舟だけが真直ぐに進んで行きます。私は眠くて時々うっすらくっしていましたがそれが夢見心地というか、たいへんロマンチックで決して忘れる事の出来ない光景でした。山へどうして登るかと言えればそれは大変キザな言葉ですが自然との触れあいです。何故自然に会いたいかといえれば都会の日常生活では決して得ら

れないロマンが横溢していきからです。湖はやがて両岸がせばまって川を逆行するようになりまして。それは全く短い距離でした。なかなか丁マゾンの原生林の中を逆行して行くような気分がよく、始まる私道の冒険の旅立ちには本当にふさわしい光景でした。忘れもしません。前回来た時の平ヶ岳前坂の登りです。私にとって屈辱の平ヶ岳への再挑戦といえればオーヴァーになりませんが今度は仲間迷惑を掛けまいとやる気でやってきた登りでした。しかしどういふ誤か稜線目前でクタクタちゃんになりました。休もうと言いました。が一言のもとに拒否されました。死にも狂いで稜線に這い上りました。一息入れて直ぐにズボンとパンツをはきかえました。冬仕度で登ったものですから手が太ももにはりついて足が上らず苦労したからです。前回は随分長く感じた大倉山もあっけなく到着。いつの間にかあたりは白い雪原になっていました。オーの水場も雪の下で足かではありませ

ん。ここから道は全く分らず前向きな道をカ
ンと頼りに歩きます。深いガスのなかで踏み
跡もありませんし夕日もエッも見当らない
ので高みを目指して登るだけです。一つゆび
ークに上りオニの水場へとはいくらか下る訳
ですがさてどちらへ下るか全く分らないので
す。しばらくうろついて石井さんが夏道を登
見、さすがと思はせたのです。が直きにヤブへ
突込んでアウト。なにしろ視界が悪いうえ
に尾根がだっつゝなのですから始末に負えま
せん。すると突然人声が聞こえました。二人
連れで彼等はサブザックで朝登ったとの事、
そしてこっ迄きて下り道が分らずウロくし
ていたのです。お互いにほつとしまして各々
の足跡をたどれば目的地に着くからと別れま
した。私達はそこで暫らく休憩していると又
人声があります。よく見ると先程別れた連
中ではありませんか。そして彼等も非常に不
思議そうな顔をしています。私達にさっきか
ら動きませんでしたか。とこっ迄尋ねます。

石井さんが私達は休んでいたのだからすつと
動いていないと一生懸命説明しても半信半疑
なのです。彼等は下山しているつもりが又え
の所へ戻ってしまった。いわゆるリングワル
ディングをやってしまったのです。なかく
納得しませんので少し石井さんが送って行き
ました。そこからは彼等の踏み跡をたどって
予定通りその日のうちに池の岳に立ちました。
それ迄白い世界でしたのに池の岳山頂池ヶ
原は数多くの池糖が満々たる水たたえて迎
えてくれました。どうして池ヶ原だけが雪
がないのか全く不思議でした。激しいガスの
動くなかで僅かに顔を出した太陽、その黄昏
の池ヶ原は大変神秘的でした。すべの池
糖が黄金色に輝き大自然のロマンを感じさせ
ずにはおきません。一つくの池糖に向って
話しかけたい気持、そしてその一つくの池
糖が何かを語りかけるようは一瞬でした。
それはほんの短い時間でしたが。
その夜はよく眠れませんでした。身体のコ

ンデシヨンが悪かったからではありません。
天気が悪かったからでもありません。いよいよ
太平山岳から尾瀬へ行くのだという気持のた
かぶりからでもありません。それは始めてツ
エルトに泊ったからなのです。そしてツエル
トが全く通気性に欠けるといふのをいやとい
う程知らされました。例の如く私は大変寝つ
きが良いので一番早く眠ったと思います。し
かし何時頃でしょうか。頬に当たる滴に目が覚
めました。風が吹くたびにペラペラと頬に水
が掛るのです。そして寝袋もびしょよりとぬ
れていくのです。原因はすぐ分かりました。皆
の吐く息がテントの内側に水滴となつてたま
りそれが風のために落ちたりテントの端に寝
ている私の寝袋をびしょぬれにしたりしてい
るのです。吉田さんと真中にして石井さんと
私が両端に寝た訳ですが端はどうしてもテン
トにくっついてぬれるものですか。石井さん
が内へ寄ってきてくる訳です。ですから彼せも私
の方へ押し寄せてくる訳で結局一番みとなし

い？私が端に押しつけられて濡れて寝られぬ
一夜となつた次第です。二人をたつき起そう
とも思つたのですが又明日明後日とみせ話に
ならなければならぬのだからとじつと我慢
の子と相成りました。登山とは山を歩いてい
る時ばかりが忍耐ではないと一つ悟りを開い
た訳です。
縦走の朝は私が朝食の当番です。ジャンケ
ンで負けた訳でも特別のペナルティーを受け
た訳でもなく相手が石井さんと吉田さんでは
言はず語らずのうち私がやるものだと思
いで思い込んでいくようでした。真暗いうちに
起きて池巻に水を汲みに行きました。コッフ
エルを鳴らしながら大きな音を立てて。こっ
は熊の多い所と聞いています。熊は夜行性で
す。月の輪熊はみとなしと聞いています。が
水場は自分の領分を守っていて水呑み場を荒
らすものには自己防衛の本能があるという事
を聞いています。だから水汲みに行つて熊に
みとわれればかたないませんので恐るゝ行つ

た話です。

再訪の平ヶ岳山頂はやはり素敵でした。三
角点のある樹林地帯は雪が溶けて地肌が出て
いました。が草原は未だく／＼深い雪の下で広々
と雪原が広がっていました。あいにくと急沼
三山の方は雲が多く見えませんでした。今日
たどる白沢山、大白沢山、景鷓山は薄い雲の
ヴェールを通した光の下に、にぶく光って見
えます。平ヶ岳の雪の斜面は尾瀬からスキー
できた人達なのでしょう。所々に竹竿が立て
られていました。もっともここの下りはがス
ラれていたらどこまで下っていいのか全く分から
なくなると思います。大白沢山迄は春山の乗
しさを満喫しました。歩く程に天気はよくな
り雪の状態も適当にしまつて歩くのにはヤブ
を隠して最高のコンディションでした。但し大
白沢山は深いヤブで道をさえぎられさすがの
石井さんも途中迄登って断念、トラヴァース
して逃げました。夏道はもつと下を通って大
白沢の池を通って後線へ出るようになってい

ると思われれますが私達は少し上とトラヴァー
スして出ました。その途中で紅茶を湯かして
大休止にしました。原生林の中のくつろぎは
大変楽しいものです。未だく／＼白い雪に埋も
れた山深い森の中に何千年も昔と同じ姿で行
む大自然、耳を澄ましても全く何も聞えない
静寂の境なのにもふりそぐ光はもう強烈な夏
の光。その光が未だ葉をつけていない木々を
通して明るくいっぱいにして込んできますか
らなんとというびやかさ、この大自然のロマ
ンこそ山に登る人々をひきつけ止まない魅力
なのではないでしょうか。そこから暫くの時
間で景鷓山頂に立っていました。それはあま
りにも簡単についてしまったので感激という
よりはむしろあつけないという感じの方が強
いようでした。しかし満足感には変わりありま
せん。尾瀬ヶ原が手の届く距離です。原を縦
断していく人が見えるようです。一生懸命目
をこらしめました。しかし人影は見る事が出来
ません。今日は日曜日ですからかなり人が

通っている苦悩のようですが……矢張り距離
がかなりあるという事なのでしよう。

私達はそのまゝ東電小屋に下る計画を変更
して途中の稜線から見えたオアシス外田代に
幕営する事にしました。何しろ雪原ですから
どこでも歩けません。大体至仏目指して行けば
よからうという事で石井さんを先導にピヨン
ピヨン飛び跳ねて駆け下ります。それは丁度
雪の中をばしゃいで行く二匹の鬼とそれを追
いかけていくユイモラスな狸のように。途中
思いかけなく水芭蕉の咲く小さな池に出て嬉
しくなりました。ここは入山禁止地区ですか
らふよつとしたら処世地ではないかなと思っ
たりして。

外田代は緩斜面の広大な草原です。まだら
に雪が残っていてその雪解けのあとから水
芭蕉が顔を出しかけて……もう私達に残
された数少ない桃源境です。夏青々とした草原
一面に咲くキスゲ、そしてあちこちに点在す
る池糖とワタスゲ。想像しただけで胸がワク

ワクします。私は所を忘れて写真に熱中しま
した。今日の仲間はず真に理解を示してくれ
ますので大変助かります。本当に嬉しいので
す。感謝します。そのゆりにはいつもの事
ですが良い写真がとれなくて済まなく思いま
す。その間に秋が仲間は設営し食事の仕度も
して待っていてくれました。千ヤーハンうま
かったのです。ものすごくうまかったのです。
ド平？な吉田さんにしては最高傑作だと思
います。でも本当は何を食べても最高傑作だっ
たと思います。先ず環境が抜群だったのです。
私達だけの桃源境なのです。もつとも熊
が出てきはしないかとキョロ／＼しました
が、そして平ヶ岳から景鷲を終ったという充
足感。それはなにものにもかえられません。
都会では決して味わう事のできないせい沢な
晩さんでした。私にとってそれは変な表現で
すが悲しい程素敵な忘れる事のできない一
コマでした。

昨晚の失敗にこりて入口を開けて寝ました。

伏晴の星夜は入口からさくくと月の光が頬を照らし眠りを妨げました。顔を少し動かせば雪原と枯れ草の織りなす奈っば、そしてその向うの林に月の光が光々と映えて怪しい空に美しい世界でした。思えば吉田さんとの出会いが今迄歩いてきた山行からもう一つ激しい山登りに変わってきたように思われます。彼女の山への情熱はひたむきであればある程ある種の美しさというものを感ぜさせます。山歩きの魅力、それは未知への憧れ、冒険心、開拓精神が一つの支えになっている。それが大きなくく支えになっているという事を改めて知らされました。今の過不足のないゆるま湯的現代、特に若い人に必要なのは冒険心探険心なのではないでしょうか。彼女は結婚適齢期というものがあつたらばもうとつとにその時期に入っていると思はれますし。早く家庭に入るべきだと思えます。女性ができるだけ早く結婚した方がよいとは私の結論です。女性の幸福は家庭に入る事にあると思えます。

すから。何年か前の「しだ」今川さんの趣味の行く末というのを思い出しました。女性結婚したら子供を育てる必要性から一時的にでも山から離れざるを得ないと思えます。ですから或いは結婚する迄が山登りの期間かもしれませぬ。そういう点で彼女には悔いのない山登りをして欲しいと思えます。そしてこれは誰れにでも言える事ですが特に女性の人達に、それは僅かの期間ではあつたにしろ山に親んで良かったと思ひ出に残る歩き方を止めて欲しいと思ふのです。吉田さんの場合果して今の会が適しているかどうか分りません。それは今の会では山に対して情熱のある仲間が少いと思はれますから。でもいい山歩きを求めていると思えます。彼女の性格がそうさせていると思えます。結婚してもその性格を生かして明るい家庭が築けると思えます。そうやって欲しいと思えます。

この夜の幕営地が素晴らしかっただけに過去の忘れられぬ山での思い出が次から次へと

浮んでは消え、昨夜とは又全く違う意味で眠らぬ一夜とまりました。



北の山旅より

鈴木 国之

雨竜沼

南暑寒荘は管理人が夏の間だけ常駐してい

る山小屋である。小屋の前はちよつと下広場に停つていて、そこが今日の泊り場だった。サツボロからきたと思われ人達がキャンプをしていた。夕暮ともなると食事の支度でにぎやかになり、夜にはキャンプファイヤーで賑がしい。食事をすまると、もう何もやることはなくなつてしまふ。シラフをひろげもぐり込む。断崖が早いから戻られる訳がないので、ファイヤーの微音をぼんやりと聞いていた。夜半、明日の天気が心配だったので外へ出ると星がとてまきれいだつた。

ペンテペタンの沢沿いの急登がいたさやいやになつた頃、ようやく雨竜沼原の一角に出た。明るくなつた空からは暖かい日差しが降り注いでくれる。笹と灌木の多い沼原だとは思いつながらちみも行くこと、急にみらけて本当の沼原に出た。東西約4キロ、南北2キロの緩い傾斜面に広がる雨竜沼原、北海道の尾瀬とも言われているが、雨竜は雨竜である。

『北海道の何とかなで片付けられたい』何か

があるはずだ。誰水も人々のない湿原の向うには、こねから登る南暑寒別岳が、ほつきりと見えた。

帰りは乳濁色の霧の中を歩いた。夕キギボウシの紫色で縁どりした地糖や、朝の大きな湿原のひろがりも無く、湿原の中の道を示す針金に導かれて歩くだけとなったが、霧の雨竜湿原こそ自分の考えていた雨竜のイメージがあった。8月だというのに湿原は秋の花しかなく、とてつもなく寂しい雨竜であった。時々霧が舞れると視界が広がるが、又すぐに閉ざされた世界に戻ってしまう。

突然人の話声が風に乗ってきた。その声はこちららに向って来る2人の登山者だった。これから先に水場はありますかとの質問に、ええ南暑寒別岳を越えた鞍部の右側にありますとよと返事をする。2人が霧の中へ消えるのを見とどげてから、自分も夕暮せまる霧の雨竜へ入っていった。

南暑寒別岳

狭くなった稜線が終ると肩の標高所に立った。ハイ松と灌木の平らな道をトラバースぎみに行くと所花畑がある。上越を想わせる標高木本の尾根道だったので、草原の所花畑がとてモステキだ。ステキな花はヨツバシオガマの群落だった。小さなヨツバシオガマの花をつぶさない様にザックを置いて、又回目の昼食をとる。

霧はいつこうに暗水そうも無いが、雨の心配だけは無さそうなのが、なによりである。その草原から山頂まではすぐだった。風雨雪に痛めつけられた枯木が白骨化していて無気味。日本海から吹いてくる強風が、山頂を示すグリキ板をバタバタとたたいている。暗れていれば奥尻、焼尻島、遠く利尻島も見えろと言われているが、今はただ寂しい山頂である。こんなに荒涼とした所に、たった一人で居ることがこねくもなってきた。留前側にも登山口が通じているのに登ってくる気配は

まったく見られないし、キャンプ場からもこの暑寒別岳があまりにも遠すぎる為か来る人がいひかた。白背の枯木のむこう側からは相変らず強い風に吹き上げられてくる霧しかこびかた。

知床硫黄山

ハイマツの茂る間に小さな空地を見つけた。ドカーと腰を下ろす。霧が流れてきたので、すぐ近くに見えるはずの羅臼岳やミツ峰はどこらとも判別がつかない。岩尾別で食事を調達することができなかつたので、朝と昼の分をいっしょにした。当然の事ながら空腹でテントの設営もみっくうである。

使い慣れたテントを広げポールを立て近くから拾ってきた岩にメインロープを張る。キスリングからシラフやエアーマット、自炊用具を出し、羅臼町側の雪溪へ水を取りに行く。重い荷から急に開放されたのと、今、羅臼平に居るんだなあと言う実感が湧いて、しだ

いに晴れ晴れとしてくる。水場まではエゾチングルマヤエゾツツジが咲いている。雪が解けた水だから飲む分には冷くておいしいが、食器洗いや米とぐ所には冷くていやなものだ。

ひとり旅の寂しさは食事の所や、寝つくまでの時間のときに特に感じるものだ。昼間歩いている場合、けがの心配さえなければ、そのままノンキなものだが、どうも夜がいきなり寂しかり屋でちよつとオセンチな自分にとつて、食事の片付けをすませ、寝つくまでの間がいやなんだ。

単独で山へ出かけたのはもう十数年も前の秋の尾瀬、三平峠から沼山峠を越え、七入から御池、尾瀬原へ登りかえし、至仏を越え鳩浜峠から戸倉へ下りたのが最初であった。そのより月前の夏、8月に北アの雲の平へ計画の中、いざ出かける前日、不安と気持のせいか一晩中寝られず、当日中止した事もあつて、予定通り尾瀬が歩けた所は嬉しかつた。

のである。

その様は初期の不安は乗り越えたと思う。

がしかし夜の寂しさだけはどうも越える事が
できない。よく人に曰夜、山の中にたった一
人で寝ていてこわくないのよと聞かれるが、
曰こわいと思ったら一人で山なんか行かない
よと答える。曰以外に強いところがあるん
だねえよと言うが、その人の言わんとする強
さという事は、何、まさすりかわからないが、
山を知らない人にとっては、山へ出かける事
を言めて、一人で山の中に泊まること事体が
「強い」という表現になるのかもしれない。

幼い頃、道端で転んだりした時や風呂屋の
湯ぶねに入る時、母以外の他人が手を貸し
てくれても絶対に起きたり、湯ぶねに入った
りはしなかった。赤ん坊の頃、何か気にいら
なくて泣き出すと、何時間も泣き続けて母や
兄を困らせたらしい。そんな遠い昔の事をふ
と考えると強いと言うよりも、強情な面があ

ったと思うし、今でも多少はなごりが残って
いると自覚もする。そんな強情さが、人にた
よらないで自分のしたい事をする、一人で山
へ行こうと仕向けたのかもわからない。強情
ではなく本当の意味で、強く、なりたいと願
う。

朝、昨日よりも一層、空模様の方はカンバ
しくない。深いガスに包まれた霧は平は無気
味に静まりかえっていた。出かけるきっかけ
が必要だった。食糧を岩尾別で調達できな
かったから、今日行動しないと明日は霧白へ下
らなくてはならない……。そんなことは今日天
気が悪そうなのに行動するかどうかのきっか
けとしては弱い。何か何でもはるばる来たん
だから……。悲愴な想いで歩くのはいやだ
し。天気が好天しそうだから……。こんな深
いガスの中でそんな明るい見通しは立てられ
ない。雨が降っていいから……。そう、雨
が降ったら引き返せばいい。降り始めた時点

で判断すればいい。もう自分に言いさかせた。

二水から歩くピークにはミツ峰、サシルイ、オツカパケ、知内別岳、そして知床硫黄山と続く長い縦走路である。それらのピークは5万分の1『羅臼』の地図を何度も何度もながめた山稜だった。

朝起きた時の静まりかえっていた羅臼平は、相変わらず深いガスの中である。指鼻標のある分岐から乳色のガスが一層濃い、縦走路へとゆっくり登っていった。もうさきほどの迷いはまったくなく、知床硫黄山までの山稜への

期待が残るだけとなった。

星のむくま

『星のむくま』

山田進

10月も終ろうとする或日、北ハツケ岳へと向っていた。新宿の55発、土曜日ならば満

員となる車内もウィークデーのためか、ガラシとしていた。茅野駅ではウトウトする間も

なく、バスは出発。荒湯で降りるのは私だけかと思っていたが、人近しい人が山登りのスタイル、なんとなく心強い、町ではそろそろ秋も終ろうとしているのに山はもう冬に入っていた。沢の流れも手の切れるよう冷たさなもわず身も引き締まる、朝食もろんびりと食べていらぬない。寒くならぬいうちにと出発。ゆつくりとマイペースで歩き出す。途中振り返ると鳳凰三山、甲斐駒、北岳が目の中に飛び込んでくる。眠りかけていた目もや々と覚める。黒百合平から天狗岳は踏跡もはっきりしない石コロだらけの道を行く。朝はあんなにすつきりと晴れていた空も天狗岳へ着く頃には薄雲が広がってきた。秋の空と……

なごと思ひながら360度の展望を楽しむ。赤岳、阿弥陀岳が呼んでいる様、だが今回は準備なし、足元もキヤラバン。行きたい気持を押えながら高見石へと歩き出す。眠の精が忍足でやってくる頃高見石へ着く。アベックが楽しそうに語りあっている。目の毒、目の毒、単

独行はこういう時は気が抜けてしまう。と単独の女の人がやつてきた。声をかけてみる。縞枯山から来て稲子湯へ下るとのこと、高見石と後に白駒池へ。今日はここで泊ろうかと迷う。だが時間もまだ早い。ここで泊ったのでは夜が長くなるので出発ときめる。縞枯山へ着く頃には足はかたがたおまけにかすもかかり、だれにも会わない。びんとなく心細くなってくる。ただ歩くのみ、やっとの思いで縞枯山荘に着いた。小屋の部屋はいくつかに別れている。私は一人。とりの部屋はアベック、向いも荒湯でみりたアベック、奥の部屋は前日から泊っていた単独の人、小屋の主も若夫婦とコブ一人、こんなことなら赤岳でも行けばよかったなあ、ストーブに暖をとりながらボンヤリとしていると急に空が明るくなった。そう夕焼です。西の空が真赤に焼ける、あわててカメウを拵ち、サンダルをひっかけた。走って行くと坪庭まで来てしまった。小屋に帰ると夕食の時間、食卓の上には数個

の皿にあかずだけが盛ってあり、コップが置かれていた、やがて酒が注がれる。ここの小屋では泊る人は皆高橋家族だそうで、私もわぬ待遇に、今までの気持もどこかへ飛んでしまふ、夜の更けるまで話しかはずむ。明日は屏風岩へコケモエを採りに行くという。明日は目が覚めてから行先を決めよう、翌日は雲ない晴天、朝煙をいっかきながらそのまま雨池へ、だれもいない早朝の同りを一人で歩き回る、静かで気持ちが良いこと、ザクザクと霜柱を踏む音だけがあとからついてくる、いつまでも歩き回っていたい、小屋に帰るとアベックはもう出発してしまつた。あとに残つた単独ヤロー、三人、卒論のために高橋現象を調査にきた学生、デジタイナーみたいな仕事をしている東京の人と私と私、小屋の主人とコケモエを取りに行くことに話しかまるとまる。9時頃、小屋をあとに雨池峠を越えて林道を歩く、行く手には浅間、美ヶ原、志賀、谷川の山々が見える。屏風岩入口から屏風岩まで

は10分とかからない距離だが、背丈を越えるもうれつな笹藪の中を泳ぎながらやつと着くガレとカラマツの頂。ロッククライミングの取り付き点まで急下降、屏風の様な岩にはハートンがベタベタと打つてある。よくもこんな所まで来て練習をするものだと感心する。山頂にたつてコケモエを採る、いつのまにかもう又時、一握りの量だがコケモエ酒を作ら楽しみかできた、大事にザックの中に入れていみんなで紅茶を飲み、又いつの日か再会できることを約し私は蓼科山へと向う。大河原峠からしばらく行くと平坦な道となり、山頂はもうすぐだと思いつつ歩く、と目の前にずいぶん高い山が見える。蓼科山より高い山がこのあたりにあったのか、行けどもなかなかに山頂らしき所には着かない。地図を開くとなんと目の前の山は蓼科山、あーあ、まだあんなに登るのか、いささかいや気がさしてくる。やつと將軍平、ここには小屋はあるが今夜も夕煙が見られそうなので頑張る。

山頂小屋まで石コロの急坂をあえぎながら登る。小屋に荷物を置きカメラを構って日が沈むまで石に腰をかけ、下の小屋から夕煙を見に登ってきた学校の先生と山の話をする。小屋に戻ると小屋番のあにいさんの友達か友人差入を構って登ってきた。慶良島出身の千葉からきたあにいちゃん、東京のいもねえちゃん、今夜は全部で4名、夕食はなぜかあかずの量が多い。夕食後風呂に入れてもらう。中からは下界の灯が見える、なんともいい気持ち。鼻歌でもでそうな気分「イイユダナー」。風呂から上がった皆んなで酒を飲む、屋久島で買ったという屋久杉で作った銚子とオチヨコを出してくれ、しきりにいい香りかするでしようとか聞いてくれるので匂いを嗅ぐけれどもあまり匂いがしない、でも悪いからウンウンといいながら、焼鳥なんぞをつまみながらごちそうになり、これまたいい気持ちになってしまった。このおえちゃんものすごい愛煙家、吸い終わったと思ったら又吸い出している。み

るまに灰皿は一パイ、皆んなが「いもねえちゃん」なんていっても全然気にしない様子。そのうち私っておかしのかしらと言いつつ、イヤイヤマイッタ・マイッタへ私ほっ「いもねえちゃん」なんて一言もいけませんので念のため話しも尽きないが明日のため私は二階の広い部屋の真中に一人、大の字で夢を見る。翌日はあにくと雲り空、白いものもチラ・ホラ、今日はなにがなんでも早く帰って仕事に出かけなければ。ストーブで焼いてくれたさつま芋を食べ、別れを惜しみながら小屋をあとにした。



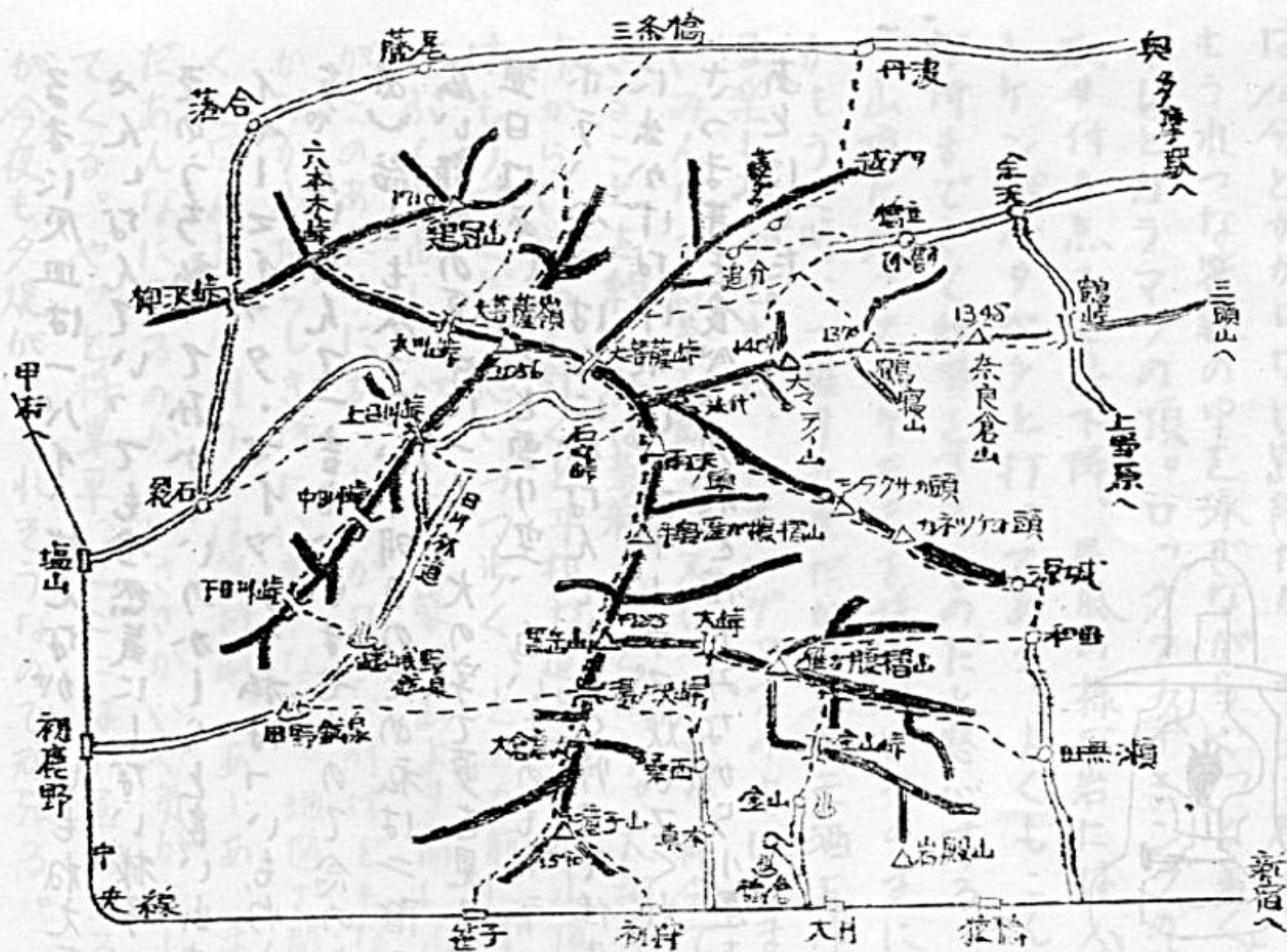
大菩薩連嶺

碓 清人

黒川鷄冠山から大菩薩嶺、小金沢山、黒岳を経て滝子山へ至る稜線を主稜とし、それより派生する枝尾根で、西は柳沢峠、東は鶴峠、南は笹子峠へ達する範囲内をいい、五万分の一地図では、丹波、都留の二枚になるのが通常いわれる大菩薩連嶺である。

その奥秩父的、そして大菩薩峠付近を除いては割と静かな山行が手軽に楽しめる処から、僕の好きな地域の一つとして過去何回か足を運んだ。

それ等を、当時の山行記録から思い出して書いてみた。



(一) S 40年8月19〜20日

裂石↓大菩薩峠↓大菩薩嶺↓

峠↓丹波 峠↓丹波

台風二十何号かの最中で霧と雨、その中で

峠には一面マツムシ草が咲いていた。

峠から嶺まで往復、これが僕にとって初め

ての百名山、そして初めての二千川峰、峠の

介山荘にて一泊。

翌朝、どしゃぶりの雨の中を丹波へ下った。

(二) S 42年10月30〜31日

裂石↓峠↓小金沢山↓滝子山↓初狩

前回同様介山荘に一泊、上日川峠まで林道

が通じていた。

小屋では単独行の男性と二人だけ、夕食の

きのこ汁とても美味だった。

翌朝6時出発、峠より新雪の雨アルプスの

峰々、二ヶ月前に登った白峰三山がなつかし

い。小金沢連嶺では、二日前に降った新雪が
処々残っていた。

湯ノ沢峠から下るつもりが余り好調なので、
更に大谷ヶ丸、滝子山を経て黄昏の藤沢部落

へ下った。

バッタンコ、バッタンコと聞こえるのは機
織の音か、シルエツトとなった富士がやけに

大きい。

初狩駅到着は17時5分、本当に歩いたとい
う山行だった。(単独)

(三) S 45年9月12日 (夜行日帰り)

裂石↓石丸峠↓牛ノ寝通り↓

奈良倉山↓余沢

現在は立派な指導標が建てられているが、当時

は何もなく石丸峠からの分岐を探したすのこ

苦労した。

米代分岐より左へ、展望はほとんど得られ
ないが、リスの姿を見、聞こえるのは小鳥の

声だけ、本当に静かなそして明瞭な道が続いた。それも小管分岐まで。奈良倉山付近では道に迷い一時間近くも空費してしまつた。

植林帯や、桑畑の中の道を経て林道へ出たとたん雨、部落の社で雨やどり。

小管からのバスを玉川バス停で一時間し待ち氷川（奥多摩）へ出た。
（単独）

(四) S46年10月16日（夜行日帰り）

裂石↓大菩薩峠↓石丸峠↓

長峰↓八坪

米代分岐を右に長峰尾根へ。道は一応明瞭だが蜘蛛の巣だらけ、それ等を棒切れで払いながら進む。

分岐から二時間程下つた頃、前方三十メートル位の樹林の中でギヤ、ギヤと獣の叫び声があり、太い幹が揺れて、鳥のけたたましいい声とバタバタと羽ばたきの音。

この付近には、まだ熊が生息しているとの

こと、季節も季節だしして、きり熊が鳥の巣を荒しているのだと思つた。

戻ろうと思つたが、せ、かくここまで来たのだしと三十分程そこで様子を見ていた。

その内回りの枝がザワザワ揺れだし、五、六匹の野猿が枝伝いに逃げていった。

何のことはない熊でなく猿だつたのだ。ほ、として又下り始める。

前方に長く連なるのは笹尾根か、あれもいずれ歩きたいコースだ。

奥多摩と大月を結ぶ林道へ出る。

休日ドライブか、品川や多摩ナンバー車の土埃を浴びながら八坪まで歩く。

ここもバスの便が悪く一時間半待つて猿橋へ出た。
（快晴、単独）

(五) S47年12月16、17日

金山鉱泉↓雁ヶ腹摺山↓大峠↓桑西

山田さん運る人と前日夕方方立で、大月の金

山鉾泉泊り。

一人で一舟の小さな湯舟、そしてとても温かいお風呂。

翌朝天気晴、金山峠を経て葉落ち枝だけとなった疎林の中の急登、途中神奈川県の水源雨量計則所があった。相模川水系の山々のだうう。

姥子山への分岐を過ぎ小一時間の登りで、三方を林に囲まれた雁ヶ腹摺山々頂。

正面には五百円札裏の眺め、頂上直下のカヤトの原で大休止。

この季節ともなれば、頬に当る風も刺す様に冷たい。

黒々と大きな黒岳、その向うに白く連なるのは南アルプスの峰々、それ等を眼前に急な下りを大峠へ向う。

峠からは沢治いの木馬道、山火事の跡を見ながら下れば、道は五里中の林道となった。

ここで甲府まで帰るといふ車に下真木まで便乗させてもらい、そこからバスで大月へ出

た。

た。

(六) S 48年2月16、17日

裂石↓丸川峠↓小金天連嶺↓

湯ノ沢峠↓焼山

雪の小金天を歩くこと、ピツケル、アイゼン、ワカンと一通り持って山田さんと二人。

丸川峠付近より雪を見る。

介山荘泊り、食付のつもりが冬季は素泊のみのこと、ラジウス、コツヘルに持った。

やむなく紅茶とクラツカト、それらにワイン、ナールソーゼージュで済ませる。

結局、二日間それだけで過した。

翌朝6時半アイゼンを付け出発、前夜からの雨がみぞれになっていた。

石丸峠から雨沢ノ頭にかけては、トレースもほとんど消えてしまいうる。

グに手間どる。水気を合んだ雪は膝までもぐ

る。アイゼンをワカンに履きかえる。

途中ツェルトを帳つた跡を見る。昨夜は寒か、たろうに。

先行者の明瞭なトレースがついている。

牛奥雁ヶ腹摺山を過ぎる頃、単独行の男性と出会う。

この先の尾根で道が判らず引帰して来たという。彼が先行者だった。

だだ、広い尾根は白一色、無雪季には一面茅戸の原だろう。

彼は左に行き過ぎたらしい。道は右側の樹林の中、やはり単独では不寧になるだろう。

黒岳山頂で水休止。みぞれは既にヤツケを通し休んでいるだけでふるえてくる。湯ノ沢

峠着十三時三十分、無雪季ならここまで四時間なのだが、荒れはてた峠の避難小屋で大休

止。ラジウスの音が心地良い。熱ったかい紅茶で一息つく。みぞれも止んだので、大倉高丸へ行ったパーティか、踏み堅

められた雪道を焼山部落へ急ぐ。

焼山部落から地元の車に初鹿野駅まで乗せてもらい、二時間の林道歩キが助かる。

(七) S 48年10月16日 (夜行日帰り)

裂石↓柳沢峠↓黒川鶏冠山↓

丸川峠↓裂石

紅葉の山を歩こうと、山田さん、吉田さんと裂石より未明の小雨の中を柳沢峠へ出発。

この道も以前は泥道で歩きにくかったが、今日は立派な舗装道路となっていた。

柳沢峠へ着く頃には雨も上り、右へ山道を六本木峠へ、振り返れば雲の上に富士の頭。

峠からは山復をまく登りらしい登りもない平坦な道、最後の一登りで岩峰の山頂。

山頂には、朽ちかけたのと、最近建て替えたらしい真新しいのと二つの祠があった。

落合部落の人々が建てたらしく、鶏冠神社の奥宮とのこと。

ここから見た大菩薩嶺は重々しいピラミタ

ルな感じ、山腹は七分の紅葉か。

六本木峠まで戻り、色づきはじめた原生林の苔むした石畳の道を丸川峠へ向う。

丸川峠の小屋で休息後、裂石へ駆け下った。これで、黒川山から滝子山まで朱纒が結べた。

(八) S49年2月17日 (夜行日帰り)

裂石↓大菩薩峠↓小菅

第二三五回支部山行として歩く。

この季節では未だ夜行持続バスはない為、タクシーで裂石まで入る。

奥さんが夜勤の夫の為につくったものか、

運転手さんからタラコのおにぎり一個もらおう。とてもおいしかった。

千石橋付近から雪を見る。

福ちやん荘で仮眠後、大菩薩峠へ。

峠では朝日の中、南アルプスの山々が白く輝いていた。

峠から小菅へと、雪の道を下った。

これで、大菩薩連嶺の主なコースは一通り歩いたつもりだが、各コース共四季それぞれ趣があり、又、未踏コースも、日川尾根や、それと結んだ源次郎岳、恩若峰、雁ヶ腹摺山から樞ノ木尾根、大谷ヶ丸から南に派生した尾根上の山々等、歩きたいコースもあり、それに最近、岩科小一郎氏の著書「大菩薩連嶺」を入手でき、これからもずっとこの地域を歩いて行きたいと思っている。



伊豆にて

遠藤真須美

伊豆半島の根元、沼津よりバスで四十分位の所へ、発端丈山という小さな山がある。標高四百メートル程の——。伊豆をいなかにもつ私は、そのふもとまでは何回か行ったことがある。ある日ある時ふと見た本に、「日本中の著名な画家、カメラマンが一度は訪れる山」として、発端丈山が紹介されてあった。ともかく、半信半疑のまま登ってみることにした。三津Y・Hの横の道に入るに、すぐミカン畑。五分程で登山道になる。伊豆の温暖な気候の中で育つシダ類やアオキは、やけに大きくつやつやしている。三十分程で視界が開け、右側の木々の間から駿河湾と富士山が見え、左側には葛城山が見える。葛城山は数

年前、ロープウェイが開通してしまった。この発端丈山があまりにも静かなのは、そのロープウェイのおかげらしい。気持のいい道をさらに進むとやがて頂上。全行程五十分の道のりだった。真下に広がる駿河湾。ヨツトの白い帆がライトブルーの海に、すばらしくマツチしている。ぽっかりと浮かぶ淡島。さすがにリッぽな雪化粧の富士山。箱根の山々。さらに遠くには、南アルプスらしきものまで見える。その頂上で過すこと三時間余。何も考えずに、ただぼんやりと。一人の男性が朝からずくと三脚を立てているそうだが、なかなか雪がどけてくれないとぼやいていた。この日に「出念」したのは、他にボーイスカウトの子供たちがいる。彼等は、遠征隊のスピの音が聞こえる以外は、まったくの別天地だ。山は高いだけがいいのではない。そんなこと前からわかっていたつもりだったが——。下りは、直接、海岸に出る道をとる。下までジグザグに続く単調な道。だんだん海が近づ

いてくる。海岸では、まだ一匹も釣っていない。釣人たちが糸をたらしっていた。世の中、石

油危機、物価高と大騒ぎしているけど、まだまだ日本は平和のようである。

東海自然歩道道中記

山本

彰

年の瀬も押し詰まり、すっかり正月気分も身近にせまってきた。すっかり舗装さかれているので、名にはじめるような歩道である。最初のカーブを右折した所で、孫の居そうな御婦人に逢った。どこまで行きますか。とたずねると、薬王院までという。左右の樹木はすっかり落葉していて、歩道の左右にある少しばかりの土の見える個所が落葉で埋れていた。こいゝザクザクと、下度雪道を歩くような気分に進むと、左後方に高尾の銜並が見え、杉の多い所なので、附近の山々には落葉した樹木が見られなかったが、遠く相模湾がかすんで見えた。やがて八王子城跡が右手に見え、

左手にケーブルの山頂駅に出合う。舗装された道を直進すると、左手に吊杉が現われ、しめなわが張られている。右手には正月用品を売る店、みやげもの店があるが、早い時間だったので、人影はまばらである。ここで婦人と合れ、薬王院の水を口にふくむと、見晴台へと直行する。このあたりまで来ると、誰とも逢わず、シーンと静まり返っている。山頂に着くと、小犬が一匹ボール相手にじゃれ回っていた。誰かが連れて来たのだろう。彼も正月が解るのか、とても楽しそうである。私も童心に帰りボールを遠くまで投げると、彼は一目散に追いかけて行く。いつのまにか二人(？)

でボール遊びに興じていた。ここで彼とも別れ、一丁平に向り出発する。数回来ているのだが、相変らずゴミ、あきかんの山には閉口する。相模湖の展望台に着くと、ここに東海自然歩道の案内板がある。ここより山中湖畔の平野まで六十七、三キロメートルと出ている。このコース沿いに行つて見ることにする。急坂を一気に降りると茶店に出る。ひとまず県道に出て、食料品店の附近まで来ると、標識が立っている。ここより弁天島に下るコースを降ると、正月を迎えようとするのか、一張りのテントがあり、三、四人の若者が居た。吊り橋を渡ると、道が分岐している。標識がないので、カンを頼りに左折すると坂道となり右手に杉林、左にキャンプ場である。登り切つた所を右折すると、標識が目につく。畑の中を通り県道に出る。ここより嵐山の登山口が左手に見える。僅かな高度ではあるが、落葉の多いじぐざぐの急登を登りつめると、

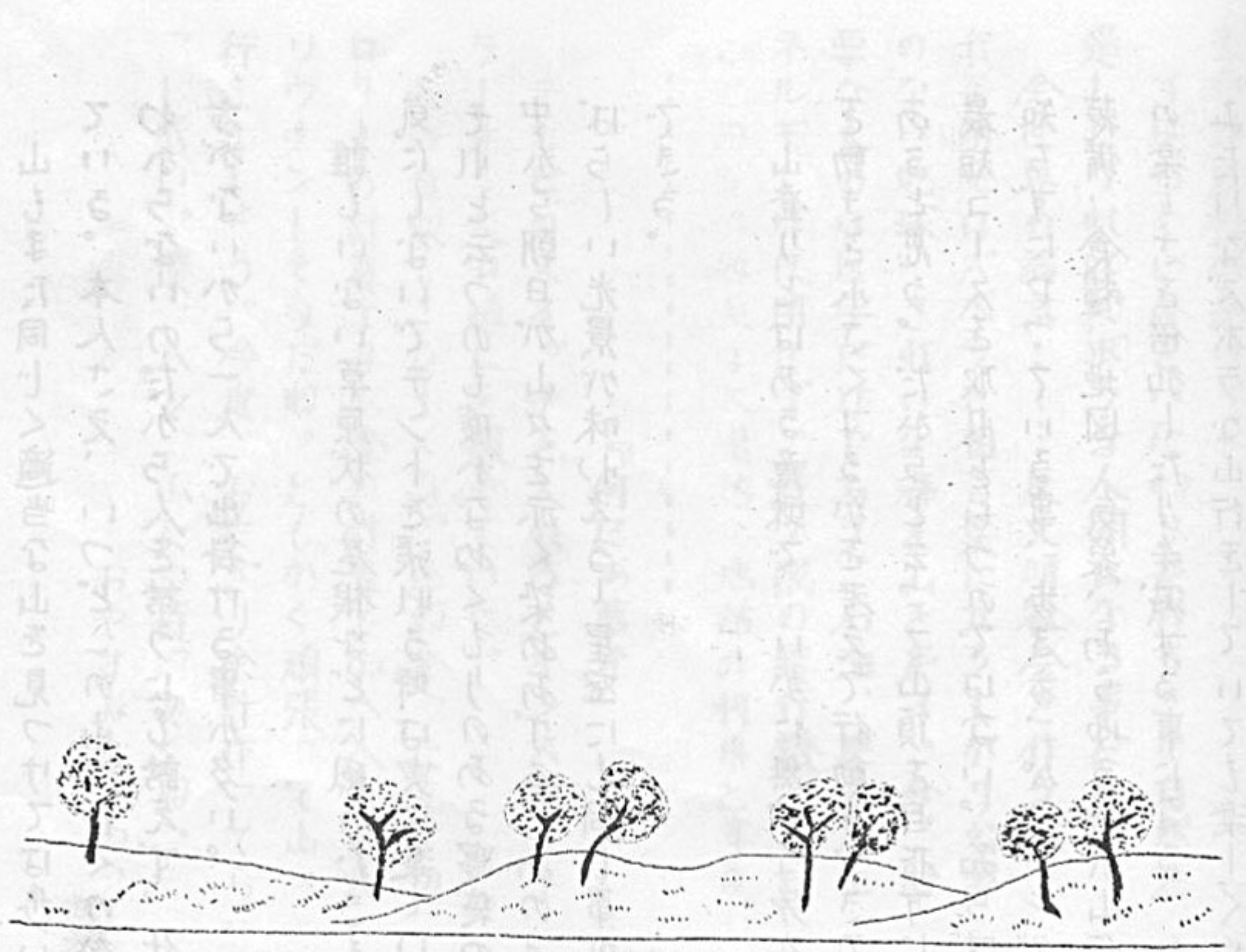
四、五本の大木及び十本程の雑木が切り倒されていた。こんな僅かな木をどうして切らねばならないか、私のような初心の山屋でも情けなくなつて来た。山頂には相変らずゴミの山を見ながら、下降すると、部落が見えて来た。ふと後を振り返つて見ると、牧場が遠くに見えている。こんなところにもまだ残つてゐる事が痛感させられた。又この附近からも相模湖が山合いに見えて来る。誰と会うことはなく、静まり返つてゐる。再び県道に出てしばらく行くと、小橋があり、これを渡ると、石老山登山口に出る。又精神病院の入口との共用でもある。これより石だたみの道を行くと、左右に大きな岩があり、その中を道が通じている。樹林帯でもあり、これより急登に注意という標識がある。幾つかのじぐざぐを登ると、石段に出てその上が林道になつてゐる。ここより顕鏡寺に出る。寺の前のベンチで若い女性が二人休んでいた。一、二分位声を掛けて、先を急ぐのとの事で別れ、これより又じぐざぐの急登が続く。幾つかのピーク

を越えながら石老山に着いたのは、二時を少し過ぎていた。これより相模湖へ二時間、篠原へ五十分と出ている。篠原部落への道は階段状の下りで、落葉の道でもある。何の変哲もない山道を、篠原へと下った頃は、すっかり汗ばんでいた。

高尾山口より篠原部落まで歩くに費した時間は四十八年十二月三十日

高尾山樹林

高尾山



ズボラ山行

横山勝利

いくら眠っても眠りたりたと云う事はない。だから余計な事を考える暇がある位なら眠る事にしてゐる。ともするとボケーとして、ぼんやりした時もあるが、恥しい話、小生いたって気ままへだらしがないと本人は自覚してゐる。に日々を過してゐる。

今年こそと決意するも元旦から外は雪と天幕でゴロゴロ。この停滞がびびりてか仕事始めはチコクせず、すんだものの年のせい、か寒さには勝てず、以後、チコク／＼の毎日、我ながらあきれはててゐる。目覚ましをかけようが何しようが目が覚めないのだから手の打ちようがない次第。

山もまた同じく適當な山を見つけては歩いてゐる。本人さえ、いつどこかの山へ行くのかわからないのだから人を誘うにも誘えず、仕方がないから一人で出掛ける事が多い。

誰もいない草原状の尾根などに風のむきも気にしないでテントを張れる時は実に楽しい。それと云うのも暖かなぬくもりのある寝袋の中から朝日が山々を赤く染めあげる。あのすばらしい光景が味わえるし、星空にも同じ事ができる。

山登りとはある意味で、いかに無駄な労力を動きを小さくするかを考えて行動すべきであると思う。だからと云つて山頂を目指すに最短コースを取れというのではない。知らず知らずにならぬ事、歩き方、パッキング、装備、食糧、地図、氣象、あらゆる物が山行の楽しさを倍加したり半減する事になる。私みたいなズボラな山行をしていても楽しくや

アルプスの山小屋

脇美英子

打角本場のアルプスへ来たのだからとフランス、イタリア、スイスの山小屋へ行つた。

＊クローベルフル小屋へフランスへ＊

ヨーロッパ高い山モン・ブランの麓にあ

る町はシャモニー。谷から見上げる山はモン

ブランとエギュー・オー等といわれる針のよ

うにとんが、た岩峰群、そして何本かの氷河

も見られる。その氷河の中にメール・ド・グ

ラス(氷の海)といわれる割と安全な氷河が

ある。町から赤い登山電車に乗って行く先は

モンダンヴェール。この終点から氷河に降り

ると、まわりにはドリユ、グレボン、グラン

ド・ジョラス等おなじみの名前の峰々がすら

と居並んでいる。目印の樽にそつてグラン

ド・ジョラスの方へ氷河をのんびりとさかのぼるとタキユル氷河(モン・ブランの方から落ちてくる)とレシヨ氷河(グラント・ジョ

ラスから落ちてくる)の分岐へ来る。ここで

レシヨ氷河に入りしばらくすると左側の岩に

はしごがかかっているのが見られる。いよいよ

よ登りだ。いくつものはしご、岩に刻まれた

足場、鉄のてすり等を頼りにグングン登る。

およそ100m程登るとお花畑の様な所へ出る。

黄色、ピンク、紫、白、日本でも見かける林

な花もあれば全く始めてお目にかかる花等、

色とりどりに咲き乱れている。グラント・ジ

ヨラスもグツと目の前にせまり、今まで見え

なかつた針峰群が足元の氷河の対岸にズラリ

と顔を並べている。気持の良い道をのんびり

登って行くと大きな岩峰群の下に階建の石

造りのクローベルフル小屋が見えてきた。近く

にはマーモットとろうかゆい小動物が住ん

でいて岩穴を出たり入ったりしていた。

小屋は入口にピツケル置場があって、入る

と左側に自炊用の部屋、奥に食堂と事務室があり2階の階は寝室となっている。3階の部屋に案内された私達は小屋の人の配慮からか日本人ばかりと一緒だった。部屋は割と大きく両側にかいこ柵の様な二段ベッドがあり、20数人は寝られそうにマットと毛布と枕がきちんと並べられていた。夕食はスープ、肉、パンを頼んだ。スープは二人用にボイルへ入れて持つてきてくれる。量はたっぷりで一二人杯分程もあった。肉もハンバーグ位の大きさでとてもおいしかった。朝食はパンとコーヒーとジャムで日本の山小屋の食事を思うと雲泥の差である。値段は日本に比較すると少々高く宿泊費は八百円位だったから食費は千三百円位した。高くてもそれだけの価値があるから日本よりも実質的にはずつと安いと思う。小屋の人でも日本の様に混まないせいかもしれない。親切で楽しかった。そういえば寝室へ行く時は上靴にはきかえるようになっていた。その上靴たるやものすごく大きく、我々日本

人まして女の子がはくには大きすぎて大きすぎて。小さいのをさがすのに苦労してしまつた。



◆モンジイノ小屋(イタリア)◆

シヤモニノからモン・ブランドンネルを抜けると40分位でイタリアへ出られる。出た所はクールマイユールという小さな北イタリアの山の町。ここでバスを乗り換えてミアージユという小さな村まで行くとモン・ブランドンの裏側を見渡す事が出来る。その村から見える尾根の上にモンジイノ小屋が建っている。こ

の小屋はイタリアの大金持が建てたもので、昔山が好きだった息子が自動車事故で亡くなったのでその追悼に建てたそうだ。大金持が建てたものらしくぜいたくに出来ていて、山小屋というよりは別荘という雰囲気的小屋である。

この小屋へ行くのもチヨツとめんどうくさい。クーベルクル小屋の時ははしごだ。たがここは鎖を頼りに登る。始めは短かい鎖の本登ると草原状の所へ出る。そこには羊が放されていて我々をものめずつしそうに見ていた。その時左側の岩壁の所でカラカラと石の落ちる音がしたのでそつちを見たら、かもしかか三、四頭走り去って行くのを見る事が出来た。あつという間で写真どころではなかつたけれど、とにかくかもしかを見た事で満足した。しばらく行くと大きな岩壁の基部へ出た。ここから長い鎖が本程上へのびている。岩は突起が多いので鎖につかまるよりも岩を頼って登る方が楽だった。何十個か登ると尾根の

上に出た。小屋はまだだいい先にあるのでのんびりと登っていた。右下には氷河がズタズタになっていて、氷の青い色がとてもきれいだ。こちら側は南面なのでシャモニー側の氷河よりずつと短かい氷河だ。小屋に近づくとなら程立派である。シユパードが我々を迎えてくれた。入口を入ると登山靴で入るのがもつたいな程きれいである。ここにもゴム製の土靴が置いてある。トイレはもちろん水洗だし、シャワールームもあった。部屋は合宿屋だがお互いのプライバシーが保たれるように工夫されているそうだ。前日雨が降ったのでここに宿泊する事が出来なかつたのがとても残念だった。頂度お昼だったのでイタリアだからスパゲッティを頼んだ。お皿にはこの小屋のマーク（ピッケルにフランコ・モジイノとかかかれた図案）がついていて、その量たうや半分程も食べるとおなかがいっぱいになりそうな程入っているのである。男の人だったら頂度はいかしく知れなかつたが我々女性に

と、ては多すぎる感じだ。た。しかし味はバツグン、食後にカプチーノ（コーヒーにミルクを入れたものだがミルクの入れ方が普通と違っている）を飲んでこれでしめて四百円にもならないのだからビツクリ。帰りは小屋のおじさんにモンジイノ小屋の絵葉書をもらい、小屋のノートに記帳してきた。日本人の山やさんもだいたいモン・ブランのイタリア側を登る為はこの小屋へ来ていようだが、女の子でわざわざこの小屋へ来ていいる人がいないから記帳した時は何となくうれしかった。モン・ブランはフランス側から見るとアイスクリームのようなけれど、イタリア側から見ると名前もイタリア語でモンテ・ビアンコへ意味は白い山でフランス語も同じとかわるようには山の姿も荒々しい岩肌を見せて男性的になつてしまふ。それだから前日の雨がたつて山に雲がまつわりつき、時々姿をチラッと現わす程度だったのがとても残念だった。

ベルグハウス（スイス）ツェルマット、自動車の入らない町、マッターホルンの町。もしもマッターホルンがなかったらこの町はこんなにならなかつたかもしれない。とにかく谷から山を見ればマッターホルンしか見えないのだから。ロープウェイに乗って上に登るとマッターホルンの他、スイスで一番高いモンテ・ロゼ、リスカム、ブライトホルン等の山々が見える。シュワルツゼー（黒い湖）からマッターホルンに向つてのんびりする時間程も歩くとヘルンリ坂の登り口に着く。そこには2つの小屋が



あり、一つはヘルンリセユツテ（スイス山岳会）もう一つはベルグハウスという。ヘルンリセユツテは外見きれいだけれどあまり静かだったのでベルグハウスへ入った。四階建てで一階は食堂、二階以上は寢室となっている。この時の宿泊も日本人同士同じ部屋だった。部屋は小さく、二段ベッドが三つだけで窓からマッターホルンが見えた。小屋の前のテラスからマッターホルンを見てみると登っている人がよく見える。まるで赤ありが右往左往している様である。外人は望遠鏡を持っていく人が多くてよくのぞいているのには感心した。スイスは物価が少々高いのでこの小屋も今までの所より高かった。食事はレストランも経営しているので比較的好きな物を選ぶ事ができた。夕食は何を食べたか忘れてしまったが七百五十円位、朝食も何やらたくさん食べたらしく同じく七百五十円位、宿泊費は九百円程だった。

この小屋の裏手へまわって二、三十川も行

くとマッターホルンの一般ルート、ヘルンリ根への登り口で、登り口から右手へまわると北壁への登りとなる。足元には今までの氷河とは多少イメージの違う、やたらとだだ、広い感じの氷河が広がり、その先にはモンテ・ローザ、グライトホルン等、又ツエルマツトの町が谷の底に見える。そんな場所にこの小屋は建っていた。

私がとまった小屋はどこもこの様にとっても景色の良い所にあった。日本より少々高くてもそれだけの価値があったのがうれしい。日本の山小屋は必需品を運び上げるだけでも大変なのだろう。でも料金に見合った内容があれば少し位高くてもがまんできると思うんだけれど。



あなた

おはようございます

楽静

薄暗い中で枕元の切絵を見ていたらタバもすぐ眠りにつきました。今朝すっきりした気分でした。早く目がさめて、夜行列車で眠れなかったのではないかと思われるあなたの事を思い出しました。

病院の窓越しに眺める丹沢山塊は、風があるせいか、それとも冷え込みが厳しいせいか今朝は事の外美しく顔を洗いながらしばしその場にたたずんで見入ってしまった。他の入院患者の人達も代わり番こに見に来ていました。誰でも大山だけは知っています。この右側に連なる山波が何山であるかわかりません。今度来て下さる時は地図と磁石をお

願います。あるおばあさんの話では秩父の山が見えると聞いたとの事ですから、あの奥の白い屋根は秩父かもしれません。皆が訪ねて下さった時、あの山波をどうして見せてあげなかったかと今頃後悔しています。きくとそちらの山も今日はきれいに見える事でしょうと、私まで嬉しくなりました。

タバの上野駅の混雑はいかがでしたか。いつもの通り調子よくすわりましたか。

最近のあなたは私が病院にいらるのをこらえ、わいとばかり遅くまで切絵に夢中になって夜更ししているのでしょうか。あなたが何もきかず、なぐたつて、しよぼしよぼしたあなたの目を見れば私にはすぐわかっています。うんですから、でもタバのあなたの顔は一寸違っていました。なんせ「スキーなんか簡単だ、要するにバランスだろう」なんて意気揚々と出かけるころうだ、たんですから、私が入院して以来、しばらく振りで見える本来のあなたの顔のような気がして、まぶしく眺めました。そしてそ

んがあなたを見て、私自身本来の私を取り戻したように心晴やかになりました。

朝食後いつもより念入りにクリームをつけ、不二屋歌謡ベストテンを聞いて、牛乳を飲んで、この手紙を書き始めました。この間は本を読み過ぎておそろく疲れから風邪をひいてしまいましたので、最近読書をお休みしています。寝ながら書くとすぐくたびれてしまうので、少し書いては何回も読み返して、今日は一日中この手紙を書いている事になりそうです。

昼食はパンとシチュウと牛乳でした。今午後の検温が終わって、たところ、36度4分です。こちらは雲が広がって、丹沢もぼやけてきました。がそちらはいかがですか。

初めてスキーを付けた感想は、要するにバランスだなんて威張っていません。今頃どんな格好でどんなスキーをしているのでしょうねえ。大きな図体で、ともない格好しないです。無茶をしては駄目です。

よ。「スキーは面白い」と言うか「スキーは話らない」と言うか、早く報告を聞いてみたくなります。

今日は日曜日、明日は祭日、本来なら「来てや、たぞ」と言うあなたの声を心待ちにしているはずなのに……さびしいけれどあなたの作品を眺めて我慢する事にします。けがをしないようにして沢山楽しんで来て下さい。お土産を忘れては駄目よ。二人分ですからね。

そんなにスキーにはばかり夢中にならないで、一休みしてミカンでも食べたらいかがですか。私も手紙はここまでにしてミカンを食べる事に致します。

楽静

思いつくままに

宮代信子

今年はどういうわけか東北の山へ足が向き
ました。6月の雄国沼・7月の月山、八甲田
山、秋田駒・9月那須の茶臼岳・11月尾瀬と
たったこれだけでしたが、それぞれに印象に
残ります。なかでも月山の雪渓とスキー姿を
目の前にして雪の深さを思い知ったことコマ
クサ・ミヤマオダマキ等今年初めてみた花も
多く、逆に昨年の北アルプスで教わったシオ
ガマやハクサンイチゲの花々に会えたことも
とても嬉しいことでした。まだまだ、誰かさ
んのあとを追いかける式の登り方、くっつい
て頂上を踏んできました、てな所です。だか
ら大きな顔をして山の名前を上げれないんで
すけど、11月23・24日の尾瀬は、湿原も見え

ない程に雪雪雪でした。青空に至仏が燧ヶ岳
が堂々としていて人気のない沈黙のま「白な
原を通して眺める姿は格別でした。飽きるこ
となくながめていたい感じでした。だから鳩
待峠入口から長蔵小屋まで14時間近くかか
たのも無理もないかもしれません。懐中電灯
を手にして歩くのは心細いねなどと言いなが
ら、日暮れと共にぐっと冷えこんだ沼畔を歩
きました。燧ヶ岳は、何といても会津駒か
ら見た双耳峰が印象に残っているせいか沼か
らの眺めはゴツゴツした山にしか思えません。
翌24日、三平峠への途中では、昨年登った会
津駒がみえました。登った山を別の場所から
みるのは嬉しいです。この味わいをもっとも
っと豊富にしていけたらなと思っっている私で
す。



我が心の山

入倉康充

広大な大自然の下、大地に一際高くそびえる山。それは無言ではあるが、どうどうとして落ち着きと力強さを携えている。そこには何か不思議な魅力が存在する。我々が都会の雑踏を離れて、大自然の奥深く踏み込めば踏み込むほど、その厳しさと共に、この不思議な魅力は更に一層身近に感じられる。

その山の風格、周囲の山波、高山植物の群々、谷川のせせらぎ、野鳥のさえずり、新緑や紅葉等四季の変化を眺め、それらに接する楽しさは格別である。

我々は目示す山の頂に達した時、今までの苦勞を全く忘れたような感激にひたってしまふ。それはこのどうどうとして風格のある山

と自分とが直接に接したという喜びであり、感激なのかもしれない。更に山頂に立って、もくもくと動いている真白な足下の雲海を眺めたり、既知の山波を望んだり、あるいは東の空から雲海が紅々と色付き、やがて紅い色のご来迎を迎ぎ見る時の気持ち良さ。夕焼もまたこれに劣らず素晴らしい。夜は大空が星の大群に被われる。その見事さは我々を疲勞や寒さから忘れさす程である。我々の山仲間も同じ感激にひたっている。そこには同じ山仲間の共通の心いきが存在する。我々は大自然を破壊することなく、また汚すことなく、山を心から愛する真の登山者達だけと、そしてこれら登山者全部と、この山を分ち合いたいのだ。

山、それは時には風雪や風雨、霧、寒さ等で我々を悩ますことがある。山へ登る過程での体力や精神面での疲勞や苦しみは厳しい。しかしそれは時には登山者のエネルギーのはけ口となり、あるいは肉体的、精神的なたん

小んとなり、また体力の維持増進につながらず、
体力に応じ、気分に応じて、登る山を決め、
登り方を調整すれば良い。

我々の山は、これら自からの厳しさ、素朴
さ、風格、力強さ等を通じて、我々に健康な
体力と、寛大な精神、内に秘めた気迫、冷静
さ、判断力、忍耐力、勇氣、美的観念等を植
えつけ養ってくれているのかもしれない。

何故か、山は私にとって、一生の友であり、
無言の指導者と思えてならないのだ。所ちの
ふく天の一月の月も入るのも心遣いの山は並
ぬつ照つて入るの山も照つちすもぐさすもが
妹が着た入りの山。黄鳥の鳴る山野の麓と峰
麓の霧の濃くも薄くも戦もさすも見させ、

素朴

丹天の雲

丹天の雲は、都市
生活の喧嘩を
やぶる。丹天の雲は、
都市生活の喧嘩を
やぶる。丹天の雲は、
都市生活の喧嘩を
やぶる。



丹天の雲は、都市
生活の喧嘩を
やぶる。丹天の雲は、
都市生活の喧嘩を
やぶる。丹天の雲は、
都市生活の喧嘩を
やぶる。

丹沢の雪

肅靜

蠟燭の燃え切るような輝きと色を見せて、
秋が暮れて久しい。黄色く明るい陽が強く斜
めに照って人の心を明るくさせようとするが、
もう天の一角にはメスのような藍碧の色が迫
って、注射針の穂先のような風が鋭い所をの
ぞかせている。

冬だ、冬だ、何処もかも冬だ
見わたすかぎり冬だ
再び彼に会いに来た硬骨な冬
冬よ、冬よ

躍れ、叫べ、彼の手を握れ

大きなイチョウの木を丸坊主にした冬

きらきらと星の頭を削り出した冬

丹沢の峰々、それよりもでかい富士の山を
張り飛ばして来た冬
そして、関八州の野や山にひゅうひゅうと
笛をならして騒ぎ廻る冬

冬だ、冬だ、何処もかも冬だ

見渡すかぎり冬だ

その中を彼はゆく

霜の上を紫紺の淡いもやが低く漂う時、西
の空に、いつ近寄ったかと思うほど山なみが
見渡せる。またすばらしく晴れてカガミのよ
うに輝いて見える時もある。日の短い冬の帰
り道はよく夜道となる。星明かりが美しい。
単に空が澄明の所為ばかりでない。明るい主
星を持った星座が現われて来るからだ。天界
に舞台を持つ人たちはそれこそ、手に汗を握
ってオリオンの勇ましい姿を見つめるだろう。
夏の山は多くのはなやかさを含んでいる。

雪溪のかたわらに草花が咲いている。雪の下でも日の目を見ようと青い草が頭をもたげている。雪溪を見ながらお花畑の衾しひに身を包むこともできる。冬の山には自ら厳寒さがある。空が紫水晶のような朝、登りつめた坂の上から、銀峰の富士が見える。

冬が来た。手近の所で思うままに偉大の彫刻を観賞し得る時が来た。ただ万全の注意と相応の準備と慎重の態度を以てこれに報いた。

日光や清潔な空気・水をもとめる人間にとって、これが都会では保障のかぎりでないから野山に出かけてゆきなさいということになればどうであろう。これは仮定のことではなく、今や事実上の問題となっている。都市生活を送らざるを得ない人びとにとって、日光や清潔な条件が貴重であるのは、生物としての本性的要求からだけで済まない。都会生活

という諸条件、諸要素の組みあわせのなかで、清潔・新鮮な自然的諸条件・諸要素が圧殺され、此れが近年の社会構造の変動はこの傾向を際立ってはげしいものになっているからである。しかも、それが都会生活だけでなく、そこを悪化させた諸要因はさらに国土とその周辺の諸領域にわたって自然環境を破壊しつつある。

画一化、組織化された人間が朝の早い時間にもかかわらず改札口をめぐらして弾丸のように走り寄り、連絡道へみるみる吸い込まれていく。椅子に座って見おくらせていた彼は、なんとなくすっきりしない思いを残して、再び一年目に機会を得た山行のため、電車に乗り込んだ。流石りきに通勤客の少ない下り電車はすいていてすぐに席を得た。

九時十分、茨沢駅着。バスで大倉口へ向う。バス停でチラシを目にしておどろいた。来月から五十円に値上するとの事である。昨年四

月に四十円に値上して一年とたたないのに再び値上とのことである。これからは、一時間以上も待たされる時には「歩く」ことに心を決める。二十分定刻に発車。平日のためチラホラ登山者がいるだけで難なく席をものにする。

この坂を登るのは今回で何回目になるだろうか。幾度登ってもいやな所だ。今日はとけだした霜の上を歩くのだから始末が悪い。こういう坂を登っていると、いつしか、早く、「尾根筋」に出たいと思ひ、今、踏んでいる一歩、一歩の苦しみを省略しようと考えている。この考えが支配的になると脚が重くなる。これではいけない。今の「一歩」が現実なのだ。脚下の滑りやすい山肌を見つめるといつとはなしに脚は軽くなる。

細かい雪が降っている。激しく窓を叩いていた風が機さくぐりぬけて冷気を運んで来た

が、今は白い世界に変わっている。殆んどすべての音が吸い取られる程に朝の雪は静かである。ついこのあいだの正月の雪の日が、何処からか聞えて来た。年に十回として数えられぬ中近東のような空が雪をとりまいている。

突然、風にあおられた霧氷が枯葉のように落ちる

強い日射しのもとで雪が解ける
ぐずりと云ったり、ピシツと云ったり
何となくそれが不満な音をたてる

不満であるが明るい小さな音だ

雪は解けて靴にまとりつく

正月最後の文句のない快晴

先を急ぐが

暖かい笹原に憩い

樹々の芸術を見たリしている

私の中でこれまで知らなかったものが
ろんろんと音を立て出すまで

太陽の投げる環をうけながら
歩み続けていこう

身をちじみあがらせる寒風は林に帰った

山の麓近くの広い石コロ道に

日なたがひろがり

サクサクという赤いじゅうたんの上の

木々の枝の交差から

幻が現われる

そのあやしさに見入る

春のまばたきが

すぐそこに待っている

昭47・1・30

自然への対抗は自然に対して人間を際立た
せる一切の文化的努力に現われる。それは恵
み深き自然に抱かれる態度でもなく、また自
然を人間の奴僕として支配する態度でもない。
自然に対して人間を「対峙」する態度である。



編集後記

しだ才25号は昨年、つまり昭和49年の春頃発行の予定でしたが、原稿のあつまりの悪いことと、もさることながら、編集者自身の都合で一年もひびてしまつた事とおわび致します。

才25号発行にあつては原稿の集りが悪いからもうやめようどが、毎年発行する必要はないではないか等の御意見もありました。しかしせつかくこのまでするのですからこれからの「しだ」については皆様の御意見等もよく聞いて少しでも長く続けられたらと思ひます。

しだ 才25号

発行 昭和五十年三月十二日

新ハイキングクラブ横沢支部

編集者

宮代 信子

脇 美英子

S H C 横 浜 支 部